

活動名 湯来こども探検隊	団体名	湯来のまち再生プロジェクト協議会
	地域	広島県広島市
	代表者	会長 武田 真哉
	支援金額	20万円
活動概要		
<p>子どもたちが「探検隊」として、地域の自然や人に対して主体的に接触し、自分たちの視点で「楽しさ」や「感動」を深め、さらには地域に対して誇りをもつようになることを目的とする。対象は湯来町に在住する小学生。探検地は主に湯来町とする。探検隊として1人一台カメラを持ち、季節ごとに設定した探検スポットへ赴く。子どもたちが興味をもった自然や人に対して「調査」・「取材」を実施し、最後には写真展を開いて、湯来町以外の人たちに魅力を伝える発信者となる。すべての活動に広島工業大学地球環境学部の生き物を学ぶ大学生たちが同行し、小学生の思いや経験が形になるようにマンツーマン体制でサポートする。</p> <p>◆実施時期 夏の教室：8/22 10時～16時 「田んぼ・川の生物でおはなしをつくろう」 秋の教室：10/24 10時～16時 「雑木林でファッションショー」 写真展：10/30</p> <p>◆参加人数 夏の教室：スタッフ2名、小学生9名、大学生11名 秋の教室：スタッフ2名、小学生7名、大学生11名</p> <p style="text-align: right;">参加総人員 42名</p>		



夏プログラム・川で生き物を探す



夏プログラム・田んぼで生き物を探す



秋プログラム・制作した衣装を着て



写真展・広島工業大学学園祭にて

◆実施に伴う効果

「今年はやらないの？」と地域の子どもたちが楽しみにしてくれるようになった。今回使用したカメラの影響が強く、クリスマスプレゼントにゲームよりもカメラをほしがることが多かったと報告があった。参加した大学生からは「小学生たちの地域に対する知識が深くもっと知りたいから来年は合宿にしてほしい」と要望があった。これまでの体験活動では、当日以外の場で体験について語ることはほとんどなかったが、徐々に小学生や大学生の中で「我が事」として活動をとらえてくれるようになった。こうした体験活動の多くは、将来を担う子供たちに期待をかけた大人たちが主催することが多く、当事者が活動の意図を理解しているかは不明であった。しかし、今後この湯来子ども探検隊は、学生や子どもたちが作っていく活動に成長する兆しが見えた。彼らがつくる活動がどのようになるか現段階では未知であるため、来年度は自主運営という形で進める決意をした。

◆苦労した点

【写真撮影】スマートフォン世代の小学生はデジタルカメラを使うことに慣れていないため、ぶれずにきちんと被写体をとらえることが大変難しかった。デジタルカメラの再生機能を利用して、撮った写真がうまく撮れているかを確認することで徐々に写真の出来栄えがよくなった。

【上級生の集中力を維持させること】対象が湯来町在住の小学生と限定としているため、活動地となる場所は普段から慣れている。小学生は、生物が多く見つかるスポットを知っているなど土地勘がある一方、その場に対する緊張感がない。そのため、活動中に危ない行動をすることや、その地に不慣れな大学生の言うことを聞かないといったことが起こり、活動に集中力を持たせることが大変難しかった。小学生一人につき、一人大学生を付けるというマンツーマン方式をとっているが、夏のパートナーはそのまま秋も継続させるなどの工夫をした。そのため、大学生との信頼関係が築かれ、秋のプログラムではどの小学生も集中力をもって活動に取り組めた。

【その他】地域連携や予算については問題なく進めることができ、活動地を快く提供いただけた。

◆今後の課題・発展の方向性

【中学生も対象とするか】これまでの2年間では、対象は「湯来町に住む小学生」に限定していた。その理由は、湯来町にはたくさんの自然体験プログラムがあるが、参加者は外部からが多いからだ。もっとも地域の自然や状況について、いろんな側面から学んでほしい地元の参加は少ないのが現状である。「湯来町の小学生限定」とすることで参加の促進を強調したかった。結果として、参加した保護者が自然とロコミで呼びかけをしてくれるようになったため、来年度以降も参加する湯来町の小学生は増えそうである。徐々に活動が浸透していることを実感しているが、小学生の児童数は年々減少し、湯来町内にある小学校は2校とも複式学級となっている。小学生だけを対象としていては、まとまった人数の確保や、活動の持続性の確保ができなくなる可能性がある。

そこで、中学生も参加対象者として検討していきたいが、小学生と中学生を同じプログラムで活動させることはレベルの差が生じてまとめるのが難しいという懸念がある。小学生からは中学生になっても参加していいかと声をもらっているため、その期待に応えたいが、どのように進めていくかは大変大きな課題である。

◆活動を終えての感想・意見等

将来の中山間地域をはじめとする、日本の過疎地を最前線で引っ張っていこう地元の小学生たちに、「問題が山積み」というイメージを故郷に持ってほしくないという思いから活動を始めた。この活動を通じて「故郷は自信を持って自慢をしよう」や、「困ったときは様々な人たちの知識や力を借りて乗り越えていける」というメッセージを年齢の近い大学生から小学生へ伝えてもらったことは大きな収穫であった。

最後に開催した「写真展」では、小学生たちには、自由参加で来場してもらった。中には一人でバスに乗って大学まで訪れた小学生もおり、朝から日暮れまで大学生と一緒に写真展と学園祭を満喫していた。プログラムの先に、こうした「持続的な関係」を築けたことは、両者にとって非常に刺激的なことだったと思う。こうしたことから、今後はプログラムを実施することが目的とならない活動ができるように努力していきたい。